

マルコによる福音書 10 章 46 節～52 節

2017 年 7 月 27 日

古本 靖久

1、聖歌 513 番 「主よわが身を とらえたまえ」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 83 ページ）

4、テキストの位置

イエス様はご自分の受難を予告された後、エルサレムに向かわれました。そしてエルサレムに入る前に最後に立ち寄った場所が、エリコでした。

エリコは旧約聖書の中で、エジプトから出たイスラエルを導いていたヨシュアが最初に占領したカナン都市として登場します。またルカによる福音書には、ザアカイが回心した場所として書かれています。

さて、今日登場する「バルティマイ」という人物は、マルコによる福音書にしか出てきません。同じようなやさしの物語は他の福音書にもあるものの、人名をはっきりと伝えているのはマルコによる福音書だけです。

今回の物語はどのようにして、イエス様たちのエルサレム入城の直前に置かれたのでしょうか。またバルティマイとイエス様との出来事から、わたしたちは何を学ばいいのでしょうか。見ていきたいと思えます。

ユダヤへ	10:1-12	律法のとらえ方
	10:13-16	子どもを来させる
	10:17-22	金持ちの男
	10:23-31	神の国に入るには
	10:32-34	第三回受難予告
	10:35-45	仕える者となりなさい
	10:46-52	従うとは



5、節ごとに

◆従うとは

10:46 (そして) =行(彼ら)はエリコの町に着いた(来る)。(そして) イエスが(彼と彼の) 弟子たちや(と) 大勢の群衆と一緒に(が)、エリコを出て行こうとされたとき(くと)、ティマイの子で、バルティマイという盲人の(目の見えない) 物乞いが道端に座っていた。

イエス様たちは、エルサレムに入る前にエリコという町に来ます。エリコはオリエント世界の最古の町の一つで、死海の北 9km の場所にあります。また地中海よりも 200m以上低い位置にあり、肥沃な平原を有します。



ここにバルティマイという目の見えない人が登場します。当時の社会において、目の見えないという状況は絶望的なものであり、悲惨なものであるとみなされていました。神殿に入ることを禁止され、他の人の助けを借りなければ生きていくことさえ困難でした。

旧約聖書には、目の見えない人の前に障害物を置くことを禁じ(レビ 19:14)、目の見えない人を道に迷わせると呪われる(申 27:18)という規定があります。このことは、目の見えない人が共同体の保護を必要とする対象だったことを意味します。しかし一方で、目が見えないことは、神さまから与えられた懲罰だとも考えられていました。

その絶望的な状況に置かれた人、バルティマイがこの物語の主人公です。彼の名前はマルコ福音書にしか記されておらず、またその後の彼がどうなったのか、あらゆる資料を探しても何も書かれておりません。

10:47 (そして) ナザレ(人)のイエスだと聞くと(いて)、叫んで、「ダビデの子イエスよ、(あなたは) わたしを憐れんでください(め)」と言い始めた。

この当時のユダヤ人は、ダビデの子孫であるメシアを待望していました。マルコ福音書では「ダビデの子」とイエス様を呼ぶのはここだけですが、初期のユダヤ人キリスト教会の中には、イエス様をダビデの子孫とする伝承があったようです。聖書を開いてみても、「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ」(ロマ 1:3)、「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」(マタ 1:1)と書かれています。

エルサレムにイエス様たちが接近しつつある今、神殿に新たな王がやって来たというイメージを、ここに見ることができます。

10:48 (そして) 多くの人々が(彼を) 叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます(いっそう)、「ダビデの子よ、(あなたは) わたしを憐れんでください(め)」と叫び続けた(んだ)。

バルティマイは叫びます。その言葉は命令形です。「どうか」とか「ください」などという丁寧な言い方ではありません。「～しろ」という強い口調です。

聖公会では聖餐式の中で、「キリエ」を唱えます。

主よ、憐れみをお与えください	キリエ・エレイソン
キリストよ、憐れみをお与えください	キリスト・エレイソン
主よ、憐れみをお与えください	キリエ・エレイソン

「キリエ」は主、「キ(ク)リステ」はキリストです。そして「エレイソン」が「憐れむ」という語の命令形です。したがってわたしたちは礼拝の中で、「主よ、憐れめ、キリストよ、憐れめ」と叫んでいるのです。

その叫びを、人々は妨げようとしません。この場面は、イエス様に触れていただこうと、子どもたちを連れてきた人々を叱った弟子たちの姿を思い起こさせます。しかしそれにもかかわらず叫び続けるバルティマイの姿に、イエス様に対する強力な思いを見ることができます。

10:49 (そして) イエスは立ち止まって、「あの男(彼)を呼んで来なさい(べ)」と言われた。(そして) 人々(彼ら)は盲人(目の見えない人)を呼んで言った(う)。「安心しなさい(しっかりしろ)。立ちなさい(起き上がれ)。(彼があなたを)お呼びだ。」

バルティマイの叫びを聞いたイエス様は、彼の元に行って手を差し伸べたのでしょうか。そうではありません。イエス様は近くにいる人に、バルティマイを自分の元に来させるようにと言います。

この場面に違和感を覚えないでしょうか。目が見えずに座り込んでいる人に対して、イエス様はなぜそのようなことを言ったのでしょうか。

この節に、「呼ぶ」という言葉が三度出ていることに目を向けたいと思います。イエス様はご自分の元に来るように「呼ぶ」のです。招くといってもいいかもしれません。つまりこの物語は、バルティマイの召命物語だということができるのです。

「起き上がる」という言葉には、「復活する」という意味もあります。助けを必要とし、信じ続ける人に対して、イエス様は招き、呼ばれ、新たな者として歩ませるのです。

10:50 (で)、盲人(彼)は(自分の)上着を脱ぎ捨て、躍り(飛び)上がってイエスのところに来た。

旧約の律法の中に、このような戒めがあります。

もし、隣人の上着を質にとる場合には、日没までに返さねばならない。(出 22:25)

日本では上着というと、上半身だけを覆うものを意味しますが、この地域では長い衣のことを指します。昼と夜の寒暖の差が激しいため、この「上着」を毛布代わりにして眠ることがあります。特に野宿をする場合には、不可欠なものです。



したがってもし借金の形に上着を取り上げたとしても、日が暮れるまでに返してあげないと、上着を取られた人は寒さのために死んでしまうかもしれないのです。

バルティマイは、上着を脱ぎ捨てました。もしイエス様がいやしてくれなかったら、上着を捨てた彼は、凍え死んでしまうかもしれません。しかしバルティマイには確信がありました。必ずイエス様は、救ってくれると。

金持ちの男(10:17-22)が財産を捨てられずに従うことができなかった場面と対照的に、ここではバルティマイは生きるために必要だったすべてを捨てて、イエス様の元に向かいます。ここで覚えておきたいのは、イエス様の呼びかけに対してバルティマイがイエス様に向かって進んだということです。決して一方的な出来事ではないのです。

10:51 (そして) イエスは、(彼にこたえて)「何をしてほしいのか」と言われた。盲人(目の見えない人)は(彼に)、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。

「何をしてほしいのか」、その問いかけは 10 章 36 節にもありました。そのときはゼベダイの子ヤコブとヨハネに対してのものでした。

バルティマイはイエス様のことを「先生」と呼びます。この語は「ラボニ」というユダヤ教の教師「ラビ」の丁寧語です。ヨハネ福音書の中で、マグダラのマリアが復活のイエス様に出会ったときに言ったのも「ラボニ」です。

なお見えるということですが、聖書の中では文字通りの肉体的な機能だけではなく、象徴的なことを意味することがあります。メシアが来ることで、すべての人の目が開かれるという希望を人々は持っていました。

10:52 **そこで（そして）、イエスは（彼に）言われた。「行きなさい。あなたの信仰（信頼）があなたを救った。」（そして）盲人（彼）は、すぐ見えるようになり、なお（そして）道を進まれる（で）イエス（彼）に従っ（てい）つた。**

イエス様はバルティマイに、「あなたの信頼があなたを救った」と言われます。この言葉は、イエス様の衣の裾に触れていやされた女性にも掛けられました。彼女の信頼は、「イエス様の衣の裾にでも触れさえすればいやされる」という思いでした。ではバルティマイの信頼は何でしょうか。

以下に挙げてみました。

- ・イエス様の名前を、誰だか分からない中で叫び続ける
- ・いつまでも黙らない、人々に黙るように言われても口を閉じない
- ・イエス様の招きに対して大胆かつ熱心に応答する
- ・イエス様の招きを伝えた第三者の言葉を信じる
- ・自分が一番願っていることに焦点をあわせる（見えるように！）
- ・イエス様は願いをかなえてくれると信じる

バルティマイの目は開かれました。肉体的な目がまず開かれたことでしょう。しかしイエス様の言われた「救った」という言葉は、霊的な救済にも使われる言葉です。また今までの肉体的ないやしのときに見られた行為（唾を用いる、手を触れるなど）がないことから、バルティマイは心も体も「救われた」と言ってよいのではないのでしょうか。



バルティマイは、イエス様に従っていきます。救われるということは、魂の平安を独り占めするのではなく、具体的な行動に掻き立てられるのです。救いの出来事を伝えずにはいられない。イエス様の業に参加したい。共に神さまを賛美したい。その思いを持った人たちが、本当のイエス様の弟子となるのです。イエス様に従うとは、このようなことなのです。

この記事 最後に、イエス様はエルサレムという受難の地に入っていきます。今まではいやしのあとに「だれにも言わないように」という沈黙命令がつくことが多くありました。しかしもはや、十字架を前にして、隠す必要はありません。バルティマイも共に、イエス様の受難の道に従っていくのです。

<今日の箇所から>

わたしたちは今までに何回、「主よ、憐れみたまえ」という祈りを叫んできたでしょうか。礼拝中はおもて、日常の祈りの中で、困難にぶつかったとき、悲しみがいえないとき、様々な場面で祈ってきたことでしょうか。



今日の箇所に登場するバルティマイは、わたしたちの姿です。わたしたちは、本当は神さまの前では憐れみを乞うしかない存在です。でも「主よ」と叫ぶ前に、自分の力で何とかしよう、乗り越えていこうと考えているのではないのでしょうか。

イエス様はバルティマイの姿勢を「良し」とされました。バルティマイはひたすら願い、あらゆる抵抗があっても叫び続けることで勇気と希望を与えられました。そしてイエス様の招きに応じ、イエス様に向かって歩み、イエス様の問いに応答し、目を開かされ、み跡に従っていきました。

わたしたちにはそのような信仰があるのでしょうか。絶えず祈っているのでしょうか。多少の困難に怖じ気づいてはいませんか。招きに応じていますか。せつかく手を差し伸べてもらったのに、イエス様に従うことなくそっぽを向いてはいないのでしょうか。

これから先バルティマイは、見たくない物まで見せられることになります。目が見えないままだったら見ることはなかった、十字架を担いで歩かされるイエス様の姿を、見ることになるのです。

見えるようにされて、そしてイエス様に従って初めて、イエス様の受難に出会います。目を背けたくなる場面です。しかしイエス様の十字架がなかったならば、そして復活がなかったならば、わたしたちに本当の救いは訪れないのです。

イエス様は受難の道を突き進みます。それは、わたしたちの憐れみを求める声が聞こえるからです。神さまにすぎるしかない、わたしたちの叫びを聞いてくださったからです。

開かれた目をしっかりと見開いて、イエス様の十字架を見上げていきましょう。イエス様の十字架を見つめ、わたしたちに与えられる憐れみを、感謝したいと思います。

今回の学びはこれで終わります。次回は8月24日(木)10時30分からです。「エルサレム入城」(マルコ11:1~11)について学んでいきます。